

第二期研究の成果

非文字資料研究センター

センター長

田 上 繁

TAGAMI Shigeru

本非文字資料研究センターが21世紀COEプログラム（2003～2007年度）の成果をうけ、その後継組織として2008年4月に発足して以来、すでに6年が経過しようとしています。21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、文部科学省より採択された5年間限定の事業であり、その間、当該テーマに関する研究を行うとともに、終了後に永続的な研究拠点を構築するという目的で推進されました。このことは、文部科学省の事業本来の目的であり、また、申請時の研究計画書の中に盛り込まれていた約束事でもありました。

21世紀COEプログラムは、世界的にも“HIMOJI”が学術用語として認められつつあるなど、多大な成果を挙げて終了することができましたが、大学当局も積極的なセンター設立を考えてくれ、最終的には日本常民文化研究所の附置機関として制度化されることになりました。周知のように、21世紀COEプログラムでは、文字に表されない資料、つまり、無限に存在する非文字資料の中から、図像、身体技法、環境・景観の3つを選んで研究課題としました。収集した資料を資料化し、それらの相互関係を分析して非文字資料の体系化を図ろうというものでしたが、21世紀COEプログラム委員会の事後評価においては、目標を達したという高い評価を与えられました。その結果を踏まえ、世界をリードする非文字資料の研究機関として、非文字資料の研究をさらに進展させるため、共同研究を組織して活動することになりました。

当然ながら、後継組織である非文字資料研究センターも、その3つの課題を引き継いで事業を推進することになりますが、これまでのような文部科学省の補助金はなく、大学の自主的な財源で事業を推進しなければならず、そのため事業規模や研究員数の縮小を余儀なくされました。また、非文字資料研究センターは、永続的な研究機関であるため、各研究課題について期間を区切って取り組む必要があります。そこで、研究期間を一期3年として数班の共同研究を展開することとし、3年で区切ることにより研究の達成目標を明確にし、3年ごとに新しい研究に取り組む形を整えました。すでに、2008年度から2010年度までの第一期が完了し、2011年度からは3年間にわたる第二期の研究を推進してきました。

第二期の研究は、下記のように、非文字資料に関する共同研究として5課題7班を設定しました。なお、第4班の水辺の生活環境史は、全体で1つの班を形成していますが、内容的には、2つのテーマに分かれています。

共同研究

1. 生活絵引編纂共同研究

A. 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』 編纂共同研究

B. 『日本近世生活絵引』 奄美・沖縄編纂共同研究

C. 『ヨーロッパ近代生活絵引』 編纂共同研究

2. 東アジアの租界とメディア空間

3. 海外神社跡地から見た景観の持続と変容

4. 水辺の生活環境史

① 水上生活者の歴史的変容

② 汽水域の民俗文化

5. 非文字資料の効率的な検索と安全な流通

それぞれ学内のセンター研究員を中心に、その課題を研究している学外の研究者を客員研究員として参画していただくとともに、院生を含む学内外の研究者を研究協力者として迎えて研究班を組織し、それぞれの研究課題に取り組んできました。各研究班は、精力的に課題に取り組み、大きな成果を挙げながら非文字資料の研究を進展させてきました。また、中間報告の形で公開研究会を開催し、新たに獲得した知見を年報やニューズレター上で公開してきました。第二期が終了するにあたり、このような3年間の成果は、各研究班の計画により単行本としてまとめるものと、本年報に論文として報告するものとがありますが、本号にはその共同研究7班のうち3つの班の研究成果を掲載しています。もちろん、共同研究の成果だけでなく、若手研究者の育成を目的とした奨励研究や派遣研究員の成果なども収載しており、全体的に内容豊かな構成となっています。

ところで、次年度からは第三期の共同研究に着手することになりますが、すでに、新たな7課題8班の研究課題を設定し、それぞれ非文字資料研究の一層の深化を目指しています。また、次号の年報についても、日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語、フランス語等々、多言語による原稿を受け付けることが決定しており、国際化に即応した誌面の充実が図られることとなります。読者の皆様には、本号に対する忌憚のないご批判とともに、引き続き非文字資料研究センターの第三期研究事業へのご助言と、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。